

井之礼

第七十一号



井 粟 公 民 館 刊

はじめに

井栗公民館長

五十嵐 章雄

今年も皆様に御協力をいただき文集「伊久礼」第七十一号をお届けすることができました。御寄稿いただきました方々並びに、関係者皆様に心より厚く御礼申し上げます。

令和七年、日本の政治も、世界情勢も混沌としています。そこで「浮石沈木」という四字熟語を選択しました。多くの人たちの無責任な発言が、道理に反して勢いづいた力を持つことだそうです。



石が水に浮き、木が水に沈む。ほとんどあり得ないことですが、勝手な人たちが同じようなことを言い出すと、とんでもない意見がまかり通ってしまうということです。ネット社会の負の面をうまく言い表している四字熟語と思いました。同じような意味の言葉に「三人成虎」というのもあります。虎が出た、と一人が言つても信じないが、三人が言うと本かもしれないと思う人がでてきて、やがて本当の事になってしまふという言葉です。地震などのたびにネット上に動物園からライオンが逃げたなどという画像が流れますが、まさにこれですね。言いたいことが声の大きな人につぶされてしまう。正しいことがその場の空気によつて通らないことがある。

困ったことです。過去には真っ当な考へが「非国民」などという言葉でつぶされてしまうこともあったようです。

正しい意見や、おかしいと思ったことが、言えない世の中であつてはいけません。また、何が真実かを見分ける目を養いたいものです。

さて、来年はいい年になるでしょうか？

最後になりましたが、「文集『伊久礼』」をお読みいただいた皆様には、「ご意見、ご感想などをお寄せいただきますたらありがとうございます。今後ともよろしくお願ひいたします。

目 次

はじめに	題字	元井栗小学校校長 故 安 中 久 雄（俊道）													
函館の氷と願乗寺川と龜田川	井栗公民館長	五十嵐 章 雄													
箱館歴史紀行	村 越 允 弘														
爺のたわごと	五十嵐 章 雄														
仲間との夏	阿呆の爺														
一生の宝物	吉田 結 晴														
あつたらいいな！こんな給食メニュー	飯塚 吉 平														
回想記 二	井栗小学校														
お盆の風景 令和七年	金子 靖 夫														
私の山歩き、山ある記 九	菅原 昭 子														
同じ顔	酒井 文 男														
作詞 新潟米の歌	長橋 正 宣														
作詞 おこめはみんなの命です	長橋 正 宣														
川柳、佐渡の修学旅行を終えて	旭小学校六年生														
俳句 四季詠草	伊久礼 俳壇														
あとがき	発刊委員長														
	大 山 隆 夫														
	伊 久 礼 俳 壇														
	掲載順不同														
50	49	48	47	47	35	31	25	22	13	11	10	9	4	3	1

函館の氷と願乗寺川と亀田川

村 越 允 弘

北海のロマンに挑戦した、松川辨之助の生誕二百年を記念して、顕彰碑を建立にむけて発起人会が発足したのが二月十五日で、建立するのであれば誕生日の四月九日として急いで居たので調査が不十分であつた。

松川弁之助は願乗寺の僧と協議をして亀田川の水を引き五稜郭内に水道を作り飲料水としました。その水で文久年間（一八六一～六三）に蔵前（現末廣町・銀座通の付近）の池から氷を切り出したことがあり、これが最初だとう。また慶応年間（一八六五～一八六七）には、イギリス人貿易商ブラキストンや新潟市出身の平野某らによつて、亀田川願乗寺川の川筋でも試みられたとしている。願乗寺川は、安政六年（一八五九）に願乗寺（現西本願寺別院）の僧法恵（堀川乗經）が亀田川の流れを現在の白鳥橋付近から中ノ橋を経由して高砂通り、西本願寺前を通過せしめ、銀座通りにあつた堀割へ導き、港内に流出するよう掘削した人工の川であった。

箱館奉行村垣淡路守、公務日記による資料にも、安政四年（一八五七）、アメリカの貿易事務官として着任したライスが七重浜のゴミ川（葭川現吉川町、極楽寺北側を流れている）を氷室の建設場所にふさわしいとしたと記しており、函館には開港場として早くから外国人が居住していたので、氷の利用についても関心があつたものと思われる。

まず人物像から、
「氣魄」 気力 气概 根気 気迫
「豪宕」 跡宕
「豪快」 豪宕
「豪壯」 豪壯
「剛毅」 剛毅
堂々としていて見て氣持よいこと
はでやかな勢で盛んなこと
意志がしつかりして物事に屈しないこと すぐれて
強いこと
才識がすぐれて常規で律しがたいこと しばりつけられないこと
大事業をくわだてること
大きなばかりごとをする
これ等の言葉があたえられると言う辨之助翁である。

箱館歴史紀行

五十嵐 章 雄

井栗出身の松川弁之助は、井栗の庄屋松川家の当主であると同時に、函館に渡り五稜郭の工事をはじめ開拓に活躍した。残念ながら樺太開拓に臨んで、越冬の際死者をだしたことで挫折し帰郷する。そのため功罪半ばして伊久礼神社境内に顕彰碑がつくられたのは平成に入つてからであつた。今回は函館に残る弁之助に関係した個所を訪ねるのが目的である。八月二十八日、二十九日二日間の時間が取れたので、かねて予定していた函館に行つてみた。

新函館北斗駅～五稜郭

北海道は二回目、前回は網走刑務所だつた。（もちろん見学）函館は初めての地である。新幹線「はやぶさ」で、昼過ぎに終点の新函館北斗駅に降り立つた。乗り換える在来線ホームに立つと、さすが北海道、乗車口の番号札にウシ、クマ、シカなどのマスコットの絵が描いてある。ただ線路と線路の間はススキや雑草が生い茂つており、最果て感がある。

快速函館ライナーに乗つて函館を目指す。車内放送でさかんに五稜郭へは函館駅まで行つて、市電、バス

などで行つた方が便利と言つてゐるが、当初の予定通り五稜郭駅で下車。

そこから市立中央図書館まで一直線の道を歩く。スマホの地図機能は大変便利だ。今回の旅行もだいぶ助けられた。ときどき進路を確認しながら図書館へ。だいぶ歩くと五稜郭タワーが見えてくる。図書館はすぐわかつたが、時間があるので五稜郭の石垣などを見ながら公園内をぶらぶら歩く。一面に桜の木が植えられていて、春はさぞ奇麗なことだろうと思つた。約束の時間十分前に五稜郭のすぐわきにある図書館へ。

図書館

受付で声をかけると、館長と担当の木谷（きや）さんが来て挨拶。その後三階の小部屋に通され松川弁之助に関する史料を閲覧する。「あまり史料もありませんが」とおっしゃっていたが、当時の文書、写真など貴重な資料を準備しておいてくださつた。なお、この図書館の運営は指定管理団体が行つており、担当の木谷さんも地元の人ではないため詳しい説明はできないとのこと。お土産をお渡しすると大変喜んでもらえた。（タコサブレー他）三条の図書館に勤めたことのある職員もいらつしやるとか。

約一時間史料の写真撮影など行う。ほとんど読めないので、正直使い物になるかどうか怪しいが、せつか

く用意していただいた史料なので、できるだけ写真に収めた。



※函館市中央図書館 所蔵

用意された史料をチェックし終えたので声をかけると木谷さんが来てくれ、市内の写真撮影スポットなどを教えてくれた。お礼を言つて退出。徒歩ですぐの五稜郭タワーに向かう。

五稜郭タワー

白くそびえるタワーである。とりあえず展望台最上階へ。一二〇〇円を払いエレベーターに乗る。平日木曜日午後四時前で、すいていてすぐ乗れた。二階建て展望台は東京タワーを連想する。（スカイツリーはまだ行つたことがない）最上階から五稜郭を見る。昔教科書に載つていた景色が見られた。市内のあちこちを撮影。特に弁之助が佐渡から運んだという赤松の街道の様子を撮りたかったのだが、（少し遠いので行こうかどうか迷つたが）、展望台から松並木が撮影できた。たぶんそこだと思う。帰りの電車からも見える場所だったので、最後に電車から確認したが、間違いなく赤松が茂っていた。

三十分ほどいて下へ降りる。一階は土産物が沢山あつたが、ちょっと見ただけでタワーを後にした。途中の曲がり角から「丸井今井」というデパートの看板が見えた。これも三条とは関係が深い。（丸井今井亭）

弁之助が開削した道を歩く

公園通りを歩いて函館山方面に向かう。図書館で教えてもらつた弁之助が開削したという道を歩く。港から五稜郭まで資材を運ぶための道だという。古地図では真西に向かつて伸びているように描いてあるが、実際の道は南西に向かつていたようだ。また、今では真っ直ぐに海までつながる道ではなくなつてているそうだ。歩いていて気が付いたのは、ずっと正面に函館山が見えていることである。現在はテレビ塔などが数本立つていて、弥彦山頂によく似ている。当時も弁之助は、函館山に弥彦山を重ねながら、道路を作つていったのではないかとも思った。

途中「松川町」という地域がある。これまで歩いてきた電車通りから少し北側に入った地域である。ここにも真っ直ぐな道が通つており、その先に函館山が見える。あるいはこちらの道が昔の松川街道かもしれないと。

疲れた足を引きずつて五時過ぎに宿に着く。今日は一万八千歩ほど歩いていた。いつもの十倍ほど歩いたことになる。

ホテルは函館駅周辺の朝市が開催される場所で、いろいろな店が並んでいる。オーバーアーケードの中にある食堂で夕食。他の店は時間が早いのかまだ開いて

いない。生ビールとホッケ定食二千百二十円也。リーズナブルな価格である。

二日目

護国神社、函館八幡宮

午前九時、宿から函館山に向かつて歩く。目的は弁之助が植えたといわれる護国神社の松杉を撮影、次に八幡宮にあるケヤキを撮影すること。これは井栗から持つて行つたと言われている。さらに函館山に上り、上から函館ドックを撮影すること。稲荷砲台があつたところである。

まずは護国神社へ。坂の上に赤い鳥居が目に入る。職員の姿はなく、遠足か校外学習の児童が十人ほど境内で走り回っていた。本殿の裏山に杉や松が沢山生えているが、弁之助が植えたにしては木が細く若いような気もする。あるいは二代目か三代目かも知れない。社殿を背にして振り向くと鳥居を通して海が見える。戊辰戦争で亡くなつた戦士の御靈が、遠く故郷をのぞめる風景なのかもしれない。

護国神社から二十分ほど函館山の中腹を横切るよう八幡宮に向かう。地図では近いような気がしたが、なかなかアップダウンもあり時間がかかった。神社に着くと、第二鳥居の手前右側に根元から数本に枝分か

れした古いケヤキがあり、これがそうだとすぐわかった。百六十年ほども前に、井栗から連れてこられて、

ここに鎮座し生き続けてきたのかと思うと感慨深いものがある。写真を撮り、社殿に参拝に向かう。さらに数段の階段があり、疲れてはいたがお参りしないで帰るのも惜しい気がしたので上ることにした。普通に参拝。こちらの神社は授与所に数人の職員がいた。やや賑やかである。

ロープウェイ乗り場まで歩く。来た道を戻ることになるが、山道は大変なので少し降りたところの道を歩く。途中石川啄木の住居跡があった。途中の道で同じようなキジトラの猫に三回遭つたが、互いに離れた場所なので、それぞれ別の猫のはずである。（血縁関係？）

函館山ロープウェイ、旧稲荷砲台（函館ドック）

少し雨が降り始めた十一時前ロープウェイの乗り場に着いた。一時間に四本出ている。十一時発のゴン

ドラに乗つて山頂へ。とりあえず三階の展望フロアからあちこち撮影するが、このころからカメラの調子がおかしくなる。（後でわかつたが、リュックに入れていたカメラのレンズが汗で汚れてピントが合わなくなっていた。）仕方がないので、スマホのカメラで撮る。夜であれば日本三大夜景の一つである函館の、昼

の街並みが見られた。

さらに函館ドックの写真も撮ることができた。砲台を造るには、いい場所である。湾に入つてくる船を確実に狙える。三十分程滞在して下へ降りる。帰りの新幹線には十五時四十四分函館駅発に乗ればよいので、まだいぶ時間がある。昨日は時間がなくて五稜郭内の代官所に行つていなかったことに気づいた。初めて路面電車に乗つてみる

もう一度五稜郭（代官所見学）

丸井今井デパートの前で下車し徒歩で五稜郭へ。五百メートルほどだが歩くには結構な距離である。五稜郭の堀にかかる橋を渡つて代官所へ。五百円で入場。

代官所は江戸時代末期に函館が開港するに伴い、外国船や外国人に対応するために造られた。しかしすぐに明治維新となり代官所は無意味となつた。さらに新政府と旧幕府軍の争いに巻き込まれ破損し、わずか六年で解体されている。

主として公の部分が再建された代官所は、元の三分の一ほどの規模である。しかし、できるだけ元の材質、工法で再建することに留意し造られている。建材は青森ヒバが使われておりつややかな木の肌が美しい。写真を撮つてもよいが、壁や柱に触つてはいけません、と注意されたが、思わず触りたくなる美しさである。

ヒノキとはまた違ったきめの細かさである。

各部屋の展示の中に松川弁之助の事績も紹介されていた。各部屋は畳敷きで時代劇に出てくる〇〇の間という風情、サムライの世にしばし想像をめぐらせながら順路に従つて歩いた。

そろそろ帰路につく。途中で少し遅い昼食。入りやすそうな食堂で函館塩ラーメンなるものを食す。それなりにおいしかった。七百円は今どき安いと思う。函館は全般に食べ物は安いように思われた。

路面電車で函館駅へ。近くのスーパーで土産物を調達。雨が本降りになってきた。函館ライナーに乗るためホームへでると、ターミナル駅の行き止まりのところから、ゆるくカーブした長いホームが伸びている。十五時四十四分発で新函館北斗駅に向かい、今回の旅行を終わる。



阿呆の爺

最近、農水大臣が米五キロ袋の値段で賑わしているが、その中へJA農協の予約金の話が、六十キロで言われているが、これは従前の俵一俵の事が表している。紙袋は三十キロの二袋が単価である。

田圃は六百坪二反歩であり、十五間の巾で四十間である。畦畔の巾は三分で一尺八寸まで三×四十二歩となる。

さて、米を食べるには、炊飯器では、何合炊とされて居る。五キロは何合だろうか？ 爺は計算出来ない。でも米作りは相変わらず尺貫がよい様である。

更正図も一寸を六尺としたので、六百分の一となり、やつぱり、八十八回の仕事で稻は米となる。アハハハ。

仲間との夏

吉田 結晴

この夏、小学生の甲子園と言われている高円宮賜杯全日本学童軟式野球大会 マクドナルド・トーナメントに出場しました。

この大会を目指しているチームは全国に約一万余チームいます。

この大会に出場するためには、三条市内大会、中越大会、県大会という予選を勝ち抜き、三条市で初めて全国大会出場という事ができました。

全国大会出場が決まった時は県大会までに戦つてきた多くのチームの思いを背負い、地元新潟開催ということもあり「やつてやろう」という思いで臨みました。開会式では、全国大会の緊張した雰囲気があり勝てるのか、やつていけるのか、と不安でした。

初戦はシードで迎え、対戦相手は三重県代表ということで、初回はみんな緊張で足が止まり、思い通りのプレイができませんでした。しかし先頭が出て、連打でチャンスをものにして逆転し、攻撃を緩めずに初戦を九対二で勝利しました。

翌日の三回戦は奈良県代表との対戦。初回相手の好

プレーもありながら無失点、次の回相手が打つて一点を取られた直後に雨で一時間近く中断しました。その間、控室ではチームみんなで声を掛け合って絶対勝とうなど、話をしました。再開したその後、ピンチになりながらもミスなくプレーができ、四対一で勝利する事が出来ました。

準々決勝の相手は福岡県代表、旭は二回に先制点を取られながらも三回に逆転する事ができ、三対一で勝利しました。

翌日の準決勝は、ここを勝てば新潟初の決勝の舞台。対する相手は全国優勝七回の経験がある強豪の大坂府代表との対戦でした。初回旭は、三点を取り一気に突き放し、最終回まで勝っていましたが、ここを守れば勝ちという状況で打たれて逆転負けしてしまいました。

絶対勝つと思っていたからこそ、逆転負けした時は悔しい気持ちであふれ涙でいっぱいでした。結果は全国三位となりました。

一年生から始めた野球でここまでこれたのは、実績を作ってくれた先輩たち、チームの仲間、監督、コーチ、地域の皆様、保護者の方のおかげだと思っています。

全国大会を通して自分の成長につながったし、野球

が大好きな仲間たちと絶対優勝するという強い気持ちを一つに、ここまで来れたことは、すごいことだと思います。

僕はこの経験から努力を続けることの大切さ、強い気持ちを持つことの大切さを学びました。あと少しでこのメンバーとの野球も終わりますが、もう一つの大会で必ず全国大会優勝したいです。

この夏の全国大会は僕にとつて一生の宝物です。

してもと言うので刺繡を入れる事になりました。まさかあの字があと一步のところまでいくとは、この時は全く思っていませんでした。

八月十一日開会式が行われ、全チームが集まつた時、こんなにたくさんのチームがあるんだ……と圧倒されました。その中でも旭は団員数が少ないチームだつたと思います。六年生七人、五年生三人、四年生一人、三年生二人、二年生一人の十五人でのチーム。

開会式では声を掛け合い行進をしてとてもカッコよかったです。スタンドから子ども達を見て、いよいよ始まるんだとドキドキした事を覚えていました。初日は雨で試合が流れ、シード枠だった旭は十四日、三重県代表と戦いました。初戦で緊張の中多くの皆様に応援していただき、無事初戦突破することができました。一勝できたことが子ども達も次への自信に繋がり翌日、ホーム地の三条パールスタジアムで、雨で一時中断という事もありましたが無事勝利することができます。一戦一戦するたびに子ども達の顔つきが変わっていき、強く逞しく自信に満ち溢れた顔になっていました。その時は、一日一日がとても長く感じました。が終わってしまった今本当に一瞬だったと思いました。

私の息子は昨年まで市内の別のチームに所属していました。そこから旭スポーツ少年団に移籍を決め、夢に向かい厳しい練習を毎日つづけてきました。昨年のクリスマス、サンタさんに野球カバンをお願いすることになり、そこに文字を刺繡してもらいたいと言った息子、何を刺繡するのか聞くと、『全国制覇』と言いました。正直少し恥ずかしさもありましたが、どう

一生の宝物

保護者代表 藤田 縁

準決勝の日、ドキドキでほとんど眠れませんでした。

対戦相手は大阪府の強豪チーム、私の家では朝、悔いのない試合にしようと子どもと約束しました。

結果は惜しくもサヨナラ負けでした……スタンドから負けてぐちやぐちやな子ども達の顔を見て私も自然と涙が溢れました。

しばらく時間が空いて子ども達が正面玄関に姿を現すと大泣きだった子ども達も吹っ切れたようにニコニコで戻ってきました。そんな子ども達を見て、やつぱりこの子達はすごいなと改めて実感しました。

帰りの車の中、悔しかった、勝ちたかったと気持ちを吐き出した息子。この大会を通じて本当に逞しくなったと感じました。この経験は彼らにとってこれから生きしていく上で財産になることでしょう。

一生の宝をくれた子ども達に本当に感謝しかありません。旭の子ども達、本当にありがとうございました。

そして旭スポーツ少年団を応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。

高円宮賜杯第四十五回全日本学童軟式野球大会マクドナルド・トーナメントが令和七年八月十一日から十八日まで新潟県で開催されました。

八月十七日、新潟市のハーデオフエコスタジアム新潟で準決勝の第二試合で、新潟県代表の旭（三条市）は長曾根ストロングス（大阪府）と対戦し、四対五で逆転サヨナラ負けを喫しましたが、『学生の甲子園』で県勢として十年ぶり、四度目の三位という成績を残しました。

二回戦 旭（新潟県） 九対一 庄野シリウス（三重県）
三回戦 旭（新潟県） 四対一 田原本南リトルヤンキース

（奈良県）

準々決勝 旭（新潟県） 三対一 木屋瀬バンブース
（福岡県）

準決勝 旭（新潟県） 四対五 長曾根ストロングス

（大阪府）

決勝 長曾根ストロングス 八対四 伊勢田ファイターズ
（京都府）

あつたらいいな！こんな給食メニュー

井栗小学校

パフェ

おすし

そば

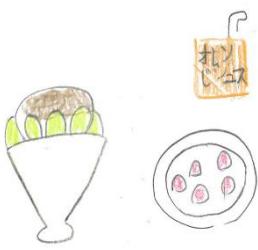
うどん

一年

関山

橙果

一年 吉田 稀彩



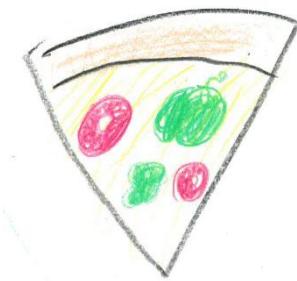
わたしは、パフェがじぶんでつくれるきゅうしょくがいいです。

シャインマスカットがいいです。あと、チョコレートあじがいいです。そしてバニラアイスがいいです。

一年 小泉 芽璃衣

わたしは、じぶんでクレープがつくれるきゅうしょくがいいです。

いちごやシャインマスカットのくだものはすきなだけいれて、チョコレートあじにします。やさいをいれたい人のために、やさいコーナーもあります。ハムやツナもいいです。みんながすきなあじのクレープメニューがあるといいです。



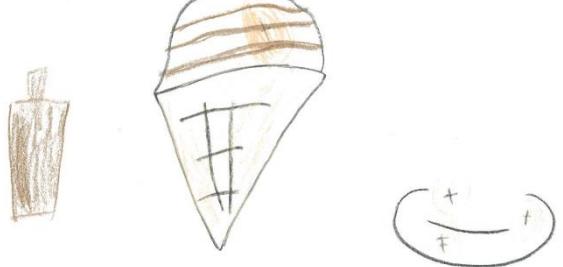
クレープ
やきにく
カレー
ポテト
ぶどう
からあげ
ナゲット
ももゼリー

一年 布施 結菜

わたしは、ソフトクリームがでてほしいです。

アイスにのせるのは、チョコやバナナがいいです。

サクサクとカリカリもいいです。



一年 田邊 和樹



ぼくは、クレープがじぶんでつくれるきゅうしょくがいいです。
いちごやバナナなどのかだものをたくさんいれます。

まわりにクリームをぐるぐるにつけてます。

あじは、チョコレートあじがいいです。
こんなきゅうしょくがでてほしいです。



一年 近藤 朱莉

わたしは、クレープをじぶんでつくりたいです。

チョコレートあじがいいです。

なかに、いちごとみかんとキウイとバナナを入れます。

こんなきゅうしょくがでたら、
うれしくなります。

一年 宮崎 葵



パフェ
からあげ
カレー
うどん
すいか
メロン
れいとうみかん
パフェはチョコレート



一年 岩崎 向日葵

わたしは、パフェがじぶんでつくれるきゅうしょくがいいです。
いちごやシャインマスカットがついているケーキがたべたいです。メロン

パンがたべたいです。
こんなきゅうしょくがでたら、
うれしくなります。

一年 宮澤 夏音

わたしは、わかめごはんとソフトクリームがでてしいです。

おかずは、からあげがでてほしいです。



二年 廣川 琴

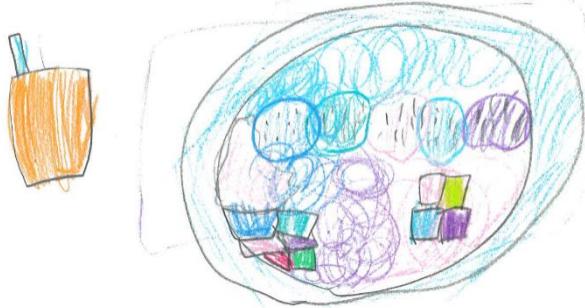
わたしはおかしいいっぱいのこんだてがでてほしいです。

グミやわたあめ、あめをいれたあまいものいっぱいのつめあわせのきゅうしょくがでたら、

「いなー！」

とおもいました。

のみものは、おうちからもつてきたジュースやおちやをのみます。



二年 土田 真妃

わたしは、おかしいいっぱいんとうがあつたら「いなー！」だと思います。

中みは、ほとんどあまいものばかりがいいです。

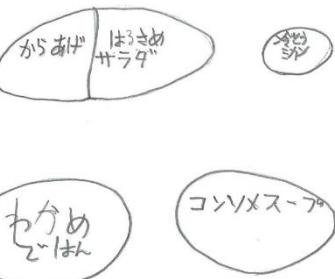
ごはんはわたあめで、ふりかけはパチパチパニックで、おかずはきのこの山とたけのこの里とポイフルとポツキーが入つていたらいいな、と思いました。

デザートは、プリンとケーキがいいな、と思いました。

これらを食べた後には、ちゃんとほみがきをしたいと思います。



二年 小林 和真



ごはん…わかめごはん
スープ…コンソメスープ
やさい…からあげ
やさい…はるさめサラダ
デザート…れいとうみかん
あと、牛乳

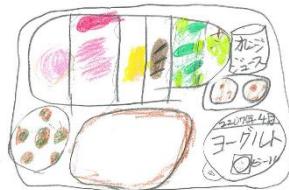
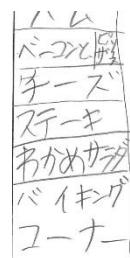
これが自分のりそな給食です。

三年 皆木 栄真

ぼくがかんがえたきゅうしょくメニューは、ピザ、キュウリのはるさめサラダ、ヤスダヨーグルト、たきこみごはん、あおさのみそりです。

たきこみごはんは、しんまいをつかいます。あおさのみそりは、こいみそをつかっています。ぜひ、つくつてみてください。

いと思いました。



三年 皆木 栄真



ぼくがかんがえたきゅうしょくメニューは、さつまいもころつけ、なし、すじこおにぎり、ミネストローネです。
すじこおにぎりはしんまいをつかっています。

さつまいもころつけは、むらさきいろのさつまいもをつかっています。ぜひ、つくつてみてください。

三年 長谷川 敏大

ぼくがこんな給食メニューがよいと思ったことを書きます。

ぼくは、食パンの上にバイキングで色々なものをのせて食べるのがいいと思いました。

あと、たこ焼きとヨーグルトとチヨコチップクッキーとシャインマスカット。そして飲み物はオレンジジュースがよ

三年 山岸 美月

三年 樋口 由乃

わたしは、ピザをじぶんでもりつけできるきゅうしょくがいいです。

チーズたつぶりでベーコンいっぱいおいしいきゅうしょくがいいです。あじは、トマトあじがいいです。ウインナーとかやさいをもりつけて、たのしくておいしいきゅうしょくがでほしいです。

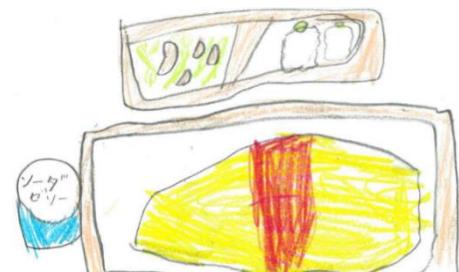
三年 皆木 栄真

わたしは、自分でアイスを作つたり、かざりつけできたりするデザートがいいです。

いろいろなアイスやフルーツなどでデコレーションしたり、スプレンやおさらもえらんだりできます。

わたしは、なんでアイスにしたかというと、あまくて、おいしいからです。あとアイスは、みんながすきだからです。

アイスのしゆるいもいっぱいです。たとえば、ブルーシルアイスやハーゲンダッツなど、しゆるいがいっぱいあって、バイキングみたいにアイスをすきなだけとりたいです。

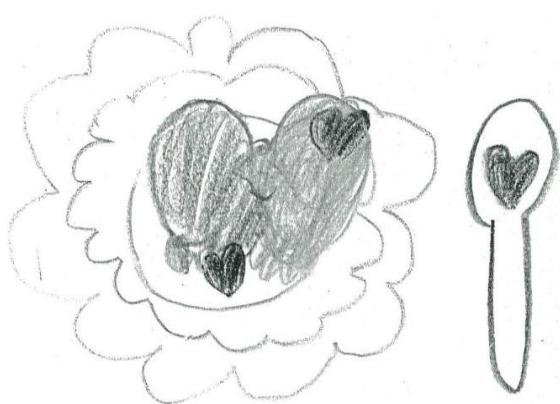


ぼくがかんがえたきゅうしょくは、オムライス、しゅうまい、リンゴのサラダ、ソーダゼリーです。

オムライスは、少し小さいオムライスです。

しゅうまいは、やきたてです。

リンゴのサラダのリンゴは、しんせんなりんごをつかっています。
ぜひ、食べてみてください。



四年 川崎 蕉音

三年 西村 碧乃



ぼくは、給食でおにぎりがたべたいです。

なぜかというと、自分でつくりとかをつけて、自分でつくったおにぎりをたべてみたいと思ったからです。

二つ目は、マックのポテトのしなしながらてきてほしいです。

三つ目は、ジュースです。

おいしいからです。



わたしは、ステーキのきゅうしょくがあつたらいいな、と思います。

なかみは、コーン、ブロッコリー、じやがいも、もものお肉があつたらいいなあ、と思います。

わたしは、コーンを最後にのこして、ごはんとステーキのたれとコーンをてっぺんの上でまぜて食べるのが好きです。

デザートは、スムージーがいいです。入れるのは、ブルーベリー、イチゴ、バナナ、ヨーグルト、牛乳、はちみつ、パイナップルを入れて食べたいです。

のみものは、ヤスダヨーグルトのイチゴです。

あと、ジエラードのミルクアイスとブルーベリーヨーグルトあじ、のうこうイチゴあじのアイスがいいです。ほかに、クリームなし雪見だいふくのもち、イチゴ、ブルーベリーがいいです。

さいごにチョコも食べたいです。

わたしは、給食にビュッフェがいいです。

なぜなら、いろいろな食べ物が置いてあるからです。おしゃうどん、ポテト・・・とにかくたくさんあります。一番人気はラーメンです。しようゆもとんこつも塩もあります。

もちろん、デザートもあります。

フルーツはいちごが人気です。いちごの種類は、「えいちごひめ」です。

ステーキも人気です！

小学生だけが知る「スペシャルメニュー」があります。「スペシャルメニュー」は、おかしもり合わせです。たとえば、ポテトチップス、ポテコ、うまいぼう、サツポロポテト。とにかく量が多いのです。でもたまにポテトチップスが切れて、ピーマンが乗っていることもあります。ポテトチップスは特大サイズです。一年間分、ふくろに入っています。女子より男子に人気があります。おいしいけど、カロリーが気になるところです。そういう時には、サラダがあります。トマト、ブロッコリー、キャベツ、キュウリ・・・人気のあるやさいがたくさんです。

あまいおかしもりあわせもあります。たとえば、ラムネ、グミ、チョコ、あめ、マシュマロなどです。マシュマロは、お願ひす

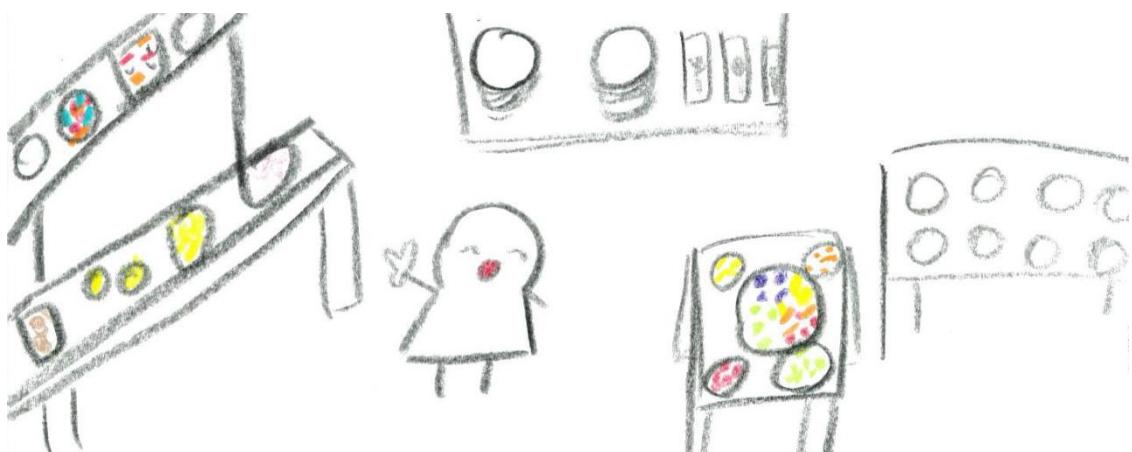
れば「焼きマシュマロ」にしてくれます。

ドリンクバーもあります。コーラ、メロンソーダ、ピーチ水、CCレモン、カルピス、カルピスソーダ、自由に飲んでOKです。

アイスもあります。チョコ、バニラ、いちご、ル・レクチエ、みかん、キウイ。

かきごおりやワッフル、ソースもあります。ソースの味は、チョコ。これも自由です。あんにんどうふにトッピングのフルーツ。

こんな給食が食べてみたいですね。



三年 相田 桃

二年 河田 悠花



わしがあつたらいいなー、とおもつたのは、ラーメンです。中に入っている具は、めん、なると、めんま、チャーシュー、ほうれんそうです。

デザートは、自分であじをえらべるアイスがいいです。チョコあじといちごあじがいいです。

わたしは、おすしがでてくるきゅうしょくがいいです。
かいてんずしみたいに、まわってほしいです。
えびをいっぱいいてたべたいです。
デザートは、パインがいいです。あまいパインがたべたいです。

のみものは、サイダーがのみたいです。たんさんがいっぱいあつてほしいです。
二日目はラーメンがたべたいです。ラーメンはみそらーめんがいいです。

デザートは、シャインマスカットがいいです。あまいのがいいです。

のみものは、オレンジジュースがいいです。

わたしはオムライスがでるきゅうしょくがいいです。ウインナーとかピーマンがはいつていると、もつといいです。
デザートは、クレープがいいです。いろんなフルーツがじぶんでいれられるものがいいです。

のみものは、アップルジュースがいいです。

二日目は、ピザとケーキとみつやサイダーです。

ピザは、マルゲリータとビスマルクがいいです。

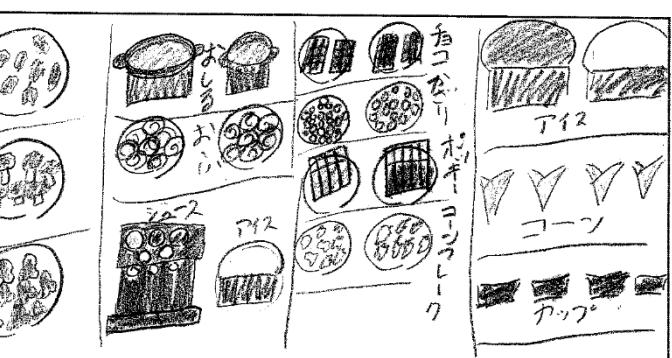
デザートは、ケーキがいいです。

二年 佐藤 まはな

わたしのあつたらいいな、こんな給食メニューは、ケーキです。

毎日ちがうケーキができるといいです。とくにチョコレートケーキがいっぱいです。絵のようにだんごごとにちがうあじがあります。

なぜケーキかというと、きゅうしょくであまりあまいものがでないからです。次の時間ににがてなべんきようがあり、つかれないうようにとう分をとりたいからです。



わたしは、バイキングがある給食がいいです。

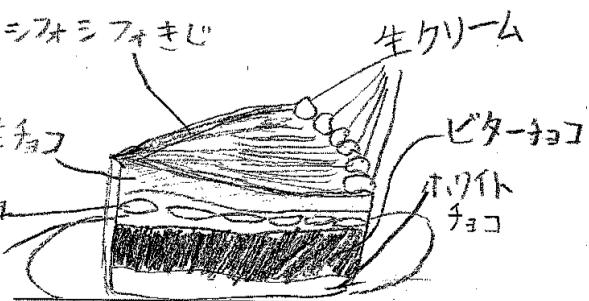
自分が好きな食べ物と、自分で作れるデコレーションアイスとジュースもあるのがいいです。

食べ物は、からあげとブロッコリーとウインナー。おしるは、おふがいっぱいはいつているのがいいです。

ジュースは、たんさんとアイス入りのジュースがいいです。

デザートは、デコレーションが好きなだけ入れられるアイスがいいです。

しそつきは、キャラクターのしそつきがいいです。はしもキャラクターのはしがいいです。月に何回も出てほしいです。



回想記 二

飯 塚 吉 平

昭和三十年、日大理工学部土木科を卒業して、高幸組があり両親の居る十日町へ帰つて来ました。高幸組は倒産、三条の羽賀組も倒産、当時建設業界は不況で大変でした。

父と飯塚建設を立ち上げ細々と小仕事で暮らしていた所に、市長に呼ばれ、城ヶ丘の山を削り野球場を建設するから設計しなさい、とのこと。約一ヶ月山を測量し、城ヶ丘の山を削つて広場にする設計をして、十日町の砂利会社と飯塚建設協同で工事は完成しました。完成後は十日町の雪祭りの会場として数年使用されました。大人口都市の札幌にはかないませんが、雪祭り発祥の地は十日町なのです。

その後、日本水道と学生時代から交流のある人が十日町へ来て、津南町の簡易水道工事の受注に協力して、日本水道が津南町上段の簡易水道を受注し飯塚建設で下請けをして完成しました。水源は、名水百選に選ばれた龍ヶ窪の清水でした。

十日町は冬は雪で建設業の仕事が少ないので、家計の関係もあり、昭和三十八年私は日本水道（株）の社員として

働く事になり、一月七日上京、日本水道の本社に行きました。次の日、埼玉県小鹿野町長若地区の水道工事現場主任として行くことになりました。全国九十六%水道を引くとの国策により全国で簡易水道事業が行われた時代でした。長若の区長宅へ行くと、下宿している日本水道の職員二人、しょんぼりしているのでどうしたのかと聞いたら、人夫頭が人夫賃を払わずに持ち逃げしたとの事。当時、配管工事は人力（機械のない時代）で、集落の住人が協力して土方に出て働いた正月用の小遣いを持ち逃げされたのです。会社へ電話したら、人夫賃を二度払いする用意がないとの事。人望厚い農協の組合長 豊田さんにお願いして、役場からの工事費はまだ一円も会社は受取っていないのだから、工事費を全額農協が受け取る事に会社の了解を得て、農協からお金を出していただき労務費を払ったのです。工事完了後、農協の豊田さんの進言もあり会社と私個人に感謝状と、私には記念品の腕時計を頂きました。当時の時計は高く今の一ヶ月分の給料以上だと思います。会社に帰った私に青森県三沢市の水道機械設備の所長を命じられました。工事完了後、盛岡市に出張所を出すから初代所長として盛岡に残つて営業をしてくれとの事。技術から営業へ転向し約十年所長を務めたのちに、新潟出張所長に移転の指示で新潟へ何年ぶりかで帰つて來ました（日本水道では安田町、栄村（現三条市）、聖籠町その

他の工事を受注しました)。

森町の墓に眠るオババに帰つて来ました、ありがとうございましたとお参りしました。

各所の簡易水道工事をしてきました。その内の一つに岩手県和賀郡江釣子村で水道式田んぼが完成しました。別記、中谷先生がその工事をほめてくれました。現在では各所にパイプライン工法で用水路が不用となり、不用の用水路を集約して広い農面道路が出来ました。

九十二歳です。今回はここまで、「きげんよう」。

岩手県和賀郡江釣子村、和賀中央土地改良区で施工した脈絡管循環灌漑「パイネットロン」について、和賀中央方式農用水道研究会作成の概要書の中に掲載されている、中谷忠治氏の寄稿文を紹介させていただきます。

和賀中央方式の視察感想寄稿文

中谷忠治氏

久しぶりに岩手県にやつて來た。

今度の旅には、技術者としての私にとって大変なお土産が出来たのだ。それは、和賀中央土地改良区で施工した「脈絡管循環灌漑「パイネットロン」」を見たことである。

脈絡管循環パイネットロンといつても、読者の多くは、或いはひよつとしたら農業土木の専門技術者でもその具体的意

味は分からぬかも知れない。つまり従来水田につきものだつた「水路網」の代わりに、水道管即ちパイプ網を以てしたものであつて、事実長根の新設水田には、明渠は無かつた。といつて、「溝」がないわけではない。溝の代りに大小のパイプが地下に埋設されてあるのだ。

勿論、そんなことは、一般的の水利土木工事には当たり前ではないかといつてしまえばそれまでなんだが、この一般水利土木工事では当たり前のことが、実は、農業の土木工事では、当たり前ではなかつたともころに問題の発端があり、私が水田型式に一新期限を画したという意味もそこにあらう。水路が無いから一枚一枚の水田に水を入れる取水口もなく、水は、全水田の一隅に設けられたコンクリート桶の中に装置されたバルブをひねれば、いつでも必要な水量が奔流するようになつておるから、農家は、一枚毎の水田の水具合を見て、必要な水量を出せばよいから、今までのようないわゆる「手作業」灌溉がなくなることでも時代の要請に応じたものといえよう。

それに、この施設には、もう一つ「排水を還元再利用する」という工夫がなされておることである。既存の水路から汲み揚げられ、三十ヘクタールの水田を灌漑した水は、全部もとの揚水場に隣接する沈砂地に還流し、そこで沈砂した後汲み上げた地点から既存水路の中に還元放流さ

れるから、その水は、再びその水田群のかん溉に再利用され、その收支状況は、絶えず計算されておることも新しいアイディアといえる。

それと、この水田地帯を見て直感することは、地形に沿つて水田が作られており、従来のような、地域全体として土地を平らに地ならししていないことである。今迄の水田は、自然勾配を利用した水路によつてかん溉するから、勢い土地全体となるべく一定の傾斜をつけて地ならしをせざるを得なかつたのだが、この場合は、埋設管を通して圧力送水なのだから、地形の如何にかかわらずどこえでも送水出来る便利があり、あとは一枚毎の水田が平らであればよいということになる。したがつて工事費はそれだけダウンできるわけで、事実この工事費は十アール当り十一万余円しかかかつておらず、然も設計を担当した小原徳郎氏は、まだコストをダウソさせる見込みがあることを確信しておられたのもうれしいことだつた。

いうまでもなく、この一連の工事は、照井一郎理事長のアイディアを、小原徳郎氏が設計し、向洋電機（株）の島野氏と日本水道（株）盛岡出張所長飯塚吉平氏が施工を分担して出来た合作であるが、私は、まず、保守性の強い東北の農村で、こうした思いきつた近代性を打ち出した照井理事長の発想と勇気に敬意を表したい。

が、私が、同氏らと接して特にうたれたのは、同氏が、こうした公共事業に、業者の立場からコストをダウンすることに協力し苦心しておられる、ことである。公共事業には汚職が伴いがちだが、その最大の原因は、関係者が親父日の丸的な考え方になるところにあるとしてさし仕えあるまい。それが小原氏は、その反対に、コストダウンの行き方に苦心され、私もいくつかアイディアをいただいたのだが、聞いていて気持ちがよかつた。それと、私は、こうしたどこにもない近代的施設が、岩手県という後進県で、甚だ失礼な言分で恐縮だが、然も、農林省の農業土木技術と関係なく行われたことを重要視する。

十万或いは二十万といわれる農業土木技術者或は、高いこれらの技術陣を擁する大規模な建設業者の中から、今までに、こうした技術が生まれなかつたのは、一体なぜだろう。考えようによつては、この技術は、そうした官僚とそれに連なる技術陣に対して一発うち込んだという感じがなくはない。

それはなぜだろうか。考えさせられる問題ではなかつたろうか。とにかく全くすばらしい偉業だ。

次は、測量設計を受け持つた小原グループの努力である

お盆の風景 令和七年

酒井文男

明日、印刷するから、原稿通りかどうか見てくれないか?」

えーっ。それはダメ。一番不得意な仕事よ」
妻はそう言って断つた。翌一日、さて彼ならできるかと、

お盆前の週の初め、とある同人会が主催する文学大賞。

二次審査通過作品だと言つて手渡される。

審査委員長用に大きくして送つていただけないかしら」

当然データーは無いですよね」

ぞう、応募作品は紙ベースで郵送で来ますからね」

U編集長はさらりとおっしゃる。

酒井さんはG先生用に送る文字の大きさや、やり方をよく存じだから、お願ひしてもいいでしよう? パソコン打つのは得意じやなかつたかしら?」

ダメとは言えない。私しかやつていなかつたことと、優しい女性編集長の依頼だから……。

関東にお住いのG先生は、視力回復の治療をされているけれど、まだ大きくて太い文字じやないと判別ができなかつた。

お盆前の私は多忙だったから、八月十日の日曜日によくパソコンに向かうことができた。作品は九編で、トータル原稿用紙四十五枚くらい。簡単と思ったそれも、他人が書いたものとなると進みは遅い。ようやく夕方に終わつた。さて、打ち込んだチエックは他人がやつた方がいい。

原稿の枚数を間違えてしまつた。まあ、いいか。

明日行けます!』

早速に返事が来た。孫は中一だが、やれるというのだからできるだろう。それより、この家に来るのがうれしかつた。

私の書斎は、以前その孫たちが住んでいた家。私が彼らの言うとおりに設計した。耐震はワンランク上。断熱も十二分。だが、数年前に空き家になつた。去年亡くなつた母に、冬は暖かくトイレも近いから、住むかと言つたことがある。熟慮したようだが、断つた。足が不自由だから靴を脱いだり履いたりがおづくのようだつた。しかし一番の理由は、住み慣れた自分の部屋を離れられなかつたのだろう。

それからしばらく鍵はかけたままだつたが、二年前にその家のダイニングキッチンの半分くらいを私の書斎にした。父が残した屋久杉の板、厚さ七センチ幅一メートル長さ二メートル。その左をスチール本棚にかけた。右はデスクワゴン

の上に置いて机の天板にする。母が残した額入りの龍の刺繡を玄関に飾った。そして妻と私は、ここで土日は食事と決めたのだった。書道教室に通い始めた妻は、食事のテーブルを、昼間は習字の練習場所に変えてしまった。そこは、私たちと亡くなつた両親との場所に変わつていた。

部屋を賃やかにしようと、四人掛けカウチソファーレ入れた。窓側に椅子型のマッサージ機も入れた。しかし、この住人との思い出は、購入した品物では埋まるはずもなかつた。だから、寂しさは隙間風のように、いつもその家に吹いていた。

八月十二日朝、孫のH君は来た。

「じじはね、ばばに言われた盆掃除があるからついていられない」

「うん、いいよ」

要は、この原稿通りに打つてあるかどうか見てもらえばいい。そうだ、直してくれれば助かるけど、パソコンできる?」

「わからないことがあれば声を掛けてくれ、外にいるから」「わかった」

単語だけの会話だった。彼は私の代わりにパソコンの前に座つた。やはりこの部屋は、前の住人が一番お似合いだ。

少しでも、そばにいたかつたがやめた。早く仕事に取り掛かりたかつたわけじやない。一人にした方がいいと考えた。

わからなければ聞くだろう。作業は任せることにして、外出した。

これから私の仕事は窓ガラスと床の掃除。玄関の土間は石張りなのだ。雪で滑るといけないから凸凹があるバーナー仕上げにした。二つの向かい合う玄関に屋根をかけて、その床もそうした。面積は内外を合わせて六坪ほどになるだろう。いつも土足で通るから汚れは付き放題。落とすにはデッキブラシでこするしかない。まったく掃除の手間がかかる。自分の好みでそうしたのだからと観念をしてやり始めた。

しばらくして、H君が声を掛ける。

「『こそ』なんだけど『を』に直したの?」

玄関から出てきた彼は作者の原稿を持って聞きに来た。どれどれと、私はパソコンの前まで行つた。

「不便を感じる」とじじは書いたんだな。原稿は『ぞ』だなあ

きつと(不便 ゾ)感じる)では不自然さが彼にはあったのだ。

そうだな。原稿通りが基本だから ゾ)に直してくれ。国語的には「を」だな。でも、この高校生は「不便」ということを強調したかつたんだろう、きつとね」

「うん、わかった」

もう、彼なら安心だ。私が望む仕事の内容を把握したの

だ。この中一の孫を少し自慢に思った。

しばらくして次の質問は「妊娠治療」と書いてある私の原稿だった。原文は「不妊治療」これは明らかに私のミス。しかし、文脈を見れば、妊娠を希望する人の治療だから「妊娠治療」も正しくはないか？ そう思うことも無理はない。

ネットで調べてみようぜ」

私は検索バーに単語を入れる。不妊治療は妊娠を成立させるための治療とあつた。

妊娠治療って言葉はあるかなあ」

調べると、その用語は出てこない。

不妊治療が正しいね。文脈でつい勘違いしたんだ。不妊を治す治療が正解だったんだね。じじも勉強になるなあ。疑問に思ったことはその時こうして直ぐに調べれば頭に入るよな」

「うん！」

今度は、彼の単語に力が入っていたのがわかつた。それからほかの質問も出たから、答えた。「：」は必ず二つで、その下にマルがなければ一文字空き。**ア**？や！**：**はマルは無しで一文字空き。カツコは下げない。カツコの次の文章は一文字下げ。これは印刷する文章の基本だから、じじは直したと伝える。基準がわからなければ、どれがミスでどれが正解かは判断に困るはずだった。教えなかつた私が悪かつたと反省する。

それからの彼は、どういう基準で原稿を直したかがわかつて作業が進んだようだ。念のため二度見てくれと頼むと承諾した。そして夕方の四時になつた。彼の仕事はようやく終わつたようだ。

データになれば後は簡単だ。早速拡大文字に加工して送るよ。ところで、これからどうする？」

ママの実家で食事する。明日はみんなで来るよ」

そうか…… そうだったな。助かつたよ、ありがとう」

私は約束のバイト代を払い、その日のうちにG先生に送つた。

日が変わつて十三日。夕方墓参りに行くのが我が家恒例になつていて、菩提寺は歩いて数分のところだから。私は朝ご飯の前にお墓掃除に行くことにした。

雨が降つたせいか、汚れはさほど感じなかつた。左側面をタオルで拭くと「平成四年五月 七代酒井益男 ヒロ」と彫つてあつたのを読んだ。そういうえば父が建てた墓だつた。今は夫婦して、祖父母や先祖と一緒にここに入つてている。近い将来、私や妻もここに入るだろう。ふとその後のことが頭をよぎつたが、考えるのをやめた。

夕方、孫たちがそろつた。長男と次男の家族。長女は間に合わなかつた。正月も盆も、なかなか一緒ににはなれないが、今年はなんとか孫だけはそろつてくれた。男一人の女三人。そう、私の助手をした男が一番上でたつた一人の男子だつた。

た。妻は、孫たちが来るとわかつて、食べきれないほどの用

意をしていた。

『いいじゃない。残つたら持つて帰つてもらえば。それも楽し
みなのよ、私』

そういうつて準備する彼女は、笑顔が絶えない。私は、幸せ
つて案外簡単に来るんだなと思つた。その十三日、賑やか
な夕食も終わりが来る。次男家族は帰つたが、長男家族の
H君たちは泊まると言つて古巣で寝た。へー、帰つてくるこ
ともあるんだと、あの家は思つたことだらう。

次の日、朝食をとると、新潟市にあるハードオフエコストアジ
アム新潟へ、野球の応援に行かなきやと言つてそそくさと帰
つた。H君は去年の小六まで旭ス波ーツ少年団にいた。その

チームが、高円宮賜杯第四十五会全日本学童軟式野球
大会マクドナルド・トーナメントに出場する。彼が在籍して
いた去年は県大会準決勝で涙を飲んだが、今年は後輩が
県大会を勝ち抜いて全国大会に出場した。いわゆる小学
生の甲子園だ。今年の開催は新潟県だった。(その後に知つ
たが、結果は三位。全国約一万チームから勝ち抜いてきた
強豪チームが出場する大会での三位だから、旭ス波ーツ少
年団は大したものだ)

その彼は、中学でクラブチームへ行くという選択肢もあつ
たが、野球は小学校でやめた。色々悩んだようだつた。

中学じや、何をする?』

小六の三学期、遊びに来た彼にその話を知つていたから
聞いた。黙つて首をかしげるだけの彼。さては決まっていない
ようだ。

『プラスバンドでも入ればいい。じじが中学二年の時プラスバ
ンド部は出来た。友達に誘われて、軽い気持ちで入つたけ
ど、猛烈な練習で鍛えられた。高校へ行つて空手部に入つ
たんだが、メンタルは断然プラスバンドが上だつた。練習ある
のみのね。空手部なんか肉体的に頑張ればいいだけで、気
持ちは折れなかつたよ。男子が少ないようだが、楽器を奏
でるのに、男女の区別は関係ないよ』

私は高校でプラスバンドから離れて、捨てきれない楽器
への思いが実はあつた。それで、わがままを言つて父からトラ
ンペットを買つてもらつた。時々それを思い出したように吹
いていた。何十年たつても、見た目は古いが楽器の命は保つ
ていた。H君にそれを吹いてみろと言つたこともあつたし、父
親が買つたほら貝も吹かせた。こうやるんだと一杯飲んだ
勢いで、自慢げに吹いて見せたものだつた。

興味があつたのだろう、彼は入部を決めた。そして今年七
月、第六十六回新潟県吹奏楽コンクール(県吹奏楽連盟、
朝日新聞社主催)へ出るからと連絡があつて、長岡市立劇
場まで聞きに行つた。なるほど彼は吹いていた。

ドランペットは簡単なパートだつたようだな。実はじじたち

も、大会があつて出たことがあるんだ」

聞きに行つたよと、私は家に来た時にちよつとかまつてやつた。そして、次に何か演奏の機会はあるのかと聞いた。

『今度はアンサンブルの練習かな』

返答が早かつた。ブラスバンドの部活を謳歌しているようだ。

『じじは何の大会だったの?』

写真をもらったんだ。あつたはずだが……』

『間違いなくあるはずと、彼が野球の応援に行つている最中に探した。あつたあつた。第十九回関東吹奏楽コンクール新潟県中越地区大会だつた。成績は半分より上の八位以内という記憶があるが、定かではない。その写真には中学三年生の私が写つていた。懐かしい。その部活の思い出が急によみがえってきた。数年前に亡くなつた友もイガグリ頭で映つていた。それをスマホに撮るとメールで送つてやつた。』

十四日夕方、一回戦の野球の応援に行つた帰りの彼らが、また家に寄つた。その時H君の妹の、小学四年のSちゃんもいたから呼び止めた。

兄ちゃんは今まで野球一本だつたから、スキーは年一回くらいだつたよ。ブラスバンドは日曜休みらしい。今年はじじチームと何回も行けるつて言つたんだよ。兄ちゃんはスキー道具を一式買わなきやいけないから、合うなら道具はあるよ。

Sちゃんも、今シーザンスキーに行く?』

去年やりたがつていていたようだつたから、四年生になつた彼女に思い切つて聞いてみた。

『行きたい……』

いつになく小声だつた。遠慮しているのか?

私は、独身の時からのスキー仲間が二人健在だつた。七十を過ぎたのに、去年の滑走日数は十数回。山形の月山にも行つたのだ。

その一人のUさんの孫はH君と同い年。彼はボーダーだ。今では追いつけないほどのスピードを出す。その彼とじじチームは、小学校低学年のころからずつと一緒に行つていたから、私はUさんがうらやましかつた。チャンスは待てばある。去年ようやくH君を志賀高原に連れていくことができた。そこで小学生の彼らは意気投合したようだつたから、なお嬉しかつた。

『うまくなりたいか?』

志賀のペアリフトに乗つている時に、私は聞いたのだった。

『うん、なりたい!』
はつきり、そう言つた。

練習あるのみだ。今までじじもいろんなことをやつたが、練習しないで「うまくなる」となんか絶対にない。ある時、急にできるようになるんだ。でもその瞬間はね、続けていなければ巡り合えないんだよ。意味わかる?』

私がそう言うと彼が大きく頷いた。あきらめてやめてしまえば、その喜びに会えない。それが彼にはわかつたのだ。

今度は彼の妹にもスキーを教えられるのかと、少しワクワクして、Sちゃんに靴下をはかせて靴の大きさを調べた。
「つま先がつかえていない？　かかとは浮かない？」

「うん、大丈夫！」

「ほら、サングラスもあるよ。かけてみな」

そういうオレンジ色に光る偏光グラスを渡す。かけて鏡に映った自分の顔を見た彼女は「あはは」と笑った。今年は楽しい冬になるようだ。いや、ちよつと忙しい冬かもしけない。

「二人の面倒をちゃんと看られるかなあ……」

あなたがSちゃんを見て、兄ちゃんはHさんたちに見てもらえればいいわよ。でも二月はダメよ。田植えの準備だわ」
妻が横から口を挟む。そう、春はNSYの田んぼが待っている。

「そうだな。でも六月はいいだろう？　月山なら雪はある。

H君、あそこはそそここうまくないと大変だぞ！」

私は、また冷やかした。今年の盆は様変わりした。私の中で色んな希望が湧いてきた。新しいのに老けたようなこの家も元気を取り戻したように感じた。夕方、私はいつものようにその家の、私の書斎に向かっていた。そして、天井までの建具をいつも開け放しにして一つの部屋で使っている隣の

和室を見た。

（泊まった時の布団が三つか。彼らがたたんだのだな。H君は二階のベッドに一人で寝たといったよなあ。この家の空気は、ずいぶんと変わったようだねえ）

それを眺めている私がこの家に語りかけた。

『私はちつとも変っちゃいない。変わったのは、あんたですよ』
するとこの家が、私にそうささやいた気がした。

私の山歩き、山ある記 九

菅 原 昭 子

うだ。心が和む程度の軽い意味で使うらしい。それとも皆さんは毎日毎日耐え難い程の心的苦痛にあえいでいるのだろうか】

思い出の山、心に残る山

私の好きな山の歌です。

♪エーデルワイスの歌（二番以下割愛）

雪は消えねど春はきざしぬ

風はなごみて日は暖かし

氷河のほとりを滑りて行けば

岩陰に咲くアルペンブルーメ

紫におう都をあとに

山に憧れ若人の群れ

登山黎明期以来、憧れを抱いて若者が山に出かけた。実際に健康的、躍動そのもの。今は？ 愈される、癒された

「と口々に唱えながら中高年はじめ大勢が山に向かっている現状に、山へ行く人は心に痛みがある人ばかりなのかと小首をかしげてしまう。丁度そんな時にYAMAP以下のある投稿を目についた。

【… 愈される風景と人々は簡単に言うけれど私は癒されることは、辛い境遇にあり心がストレスなどで病んだ人が使うべき言葉だと思っていた。けれど、どうも最近は違うよ

これはまさしく私の気持ちを言い当てており「癒される」の違和感を抱いている方が他にもいることに正直ほつとした。「癒やす」という言葉を慎重に丁寧に使いたいと思う。そして私にとつてこれから山は、山の友に年寄りの冷や水と笑われない程度の「憧れ」を持つて出掛けるくらいが丁度いいと思うのだが……

むかし昔の話、旧所属の会山行でマチガ沢へ出かけた時のこと。五月の末なのでまだ残雪がベツタリ。つまりは雪渓登り、本谷出合からピッケル、アイゼン装備。浮き足立つとともに地道に高度を上げた。要の滝下部付近で最後の一本（休憩）。私は背後の景色が気になつて後を振り向いた。ウオ、恐っ！ 立ちすくんだ。情けなかつたが一歩でさえ下向きに足が出せなかつた。急斜面の雪面、すごい所にいるんだと初めて認知した。ここで滑落したら止められるわけがない。恐る恐るまた百八十度向き直つた。上へ向いている分には恐くはない。まもなくアイゼンを外しその先からは岩場や滑りやすい草付きをより慎重に進む。上越国境稜線に出た時はほつとした。嬉しさよりも雪上歩行技術が上手くなりたいという想いで頭の中はいっぱいだつた。

翌年の秋、無雪期に再びマチガ沢へ。ヘルメットをかぶりワラジを履いて沢登り。細かい記憶は記録ノートに。下山は土合へ降りず大障子避難小屋地点で一泊、夜半から雨が降り出した。ツェルトも避難小屋も雨漏りがひどく劣悪な一晩だった。(私は満員の避難小屋組)しかし翌日はすっかり晴れ上がり平標山まで縦走。沢登りなら尚のこと軽量装備でスピードイ行动したいだろうに、沢登りの装備の他ツェルトや登山靴、その他諸々携えて、しかも雨漏りも笑い飛ばすパワー。若気の至りでは決してなく、そんなことが普通にできたのだから若さつてより大きな力をフツフツと發揮できるらしい。私一人では行けない山域に残雪期・無雪期とも憧れ満載の足跡、会山行の意義ここにありと深く感謝。

光岳～南アルプスの最南部

光岳(てかりだけ)は折り合いを付けて登った山となりました。折り合いとは……

二十八年前(一九九六年)、南アルプス南部を一人でテント担いで縦走したことがあります。最初の計画は光岳から塩見岳まででしたが、仕事の都合でどうしても続けての休暇が取れず光岳を割愛したのです。残念でしたが仕方有りませんでした。聖岳から塩見岳までに少し縮めて計画変更、しかしそれはそれでとても充実した山行で私の五本

の指に入る想い出となっています。当時は近いうちに聖岳から茶臼岳、光岳まで繋ごうと思つていましたが、そういうしているうちに他の山が優先されアクセスの悪い光岳はだんだん遠のいてしました。

今自分の歳を考えるとこの約束が果たせていないことが悔やれます。けれど聖岳からの縦走は気力もわかつもう無理でしょう。せめて光岳の山頂のピークハントだけはやろうと自分の心中で折り合いをつけて、今回は祈るような気持ちで登らせてもらいました。計画実行前に台風十号が発生、接近し林道崩壊など悪さをしなければいいがヒヤヒヤしていましたが林道は無事でした。相方が協力してくれたので車で出かけテント泊が出来ました。今回は静岡県側からではなく、長野県飯田市側からのアプローチです。

高原ロッジ下栗に前泊、時間に余裕があるからこそ前の泊です。翌日は早朝四時二十発発。まだ暗く細い山道を林道終点まで車で進み、芝沢ゲートがスタート地点。芝沢ゲートから光岳まで延々九時間と腹をくくるしか有りません。易老岳までは長い急登の連続。易老岳に着いた時は少年老い易く岳(学)なりがたし」を妙に実感。その先静高平の水場まで来ればしめたもの。南アルプスの天然水はペットボトルが結露するほど冷たかったのには驚きました。もなく待ちに待った光小屋が見えました。嬉しかった。夜

中の満点の星、明け方近くの赤く染まつた富士山が光岳の好印象となりました。展望はイザルガ岳からの方が良いです。光岳小屋で「百名山狙いですか?」と声をかけられました。私の若い頃の忘れ物のことを話したら自分たちは山

岳会のメンバーで、今回の参加者の平均年齢は七十歳を少し超えているけれど、あなたは我々よりも若いんだからまだまだ行ける」と励されました。十七名のメンバー皆さん健脚に見受けられ元気に頑張つておられる方が大勢いらっしゃるのだなあと感心しました。

ソウを見つけたことを話したら光岳より心からのプレゼントでしよう」と山友さんからメッセージが届きました。重ねて二倍にも三倍にも喜ばしく、しばらくは山の余韻に浸りました。

光岳 二五九一・五メートル

長野県側芝沢ゲートより往復

二〇一四年九月十日・十一日(火・水)

天候 連日晴れ

九月九日 前泊

十日 芝沢ゲート 五時二十分発

光小屋テント場 十四時十五分着

十一日 テント場 四時三十分発

光岳山頂 四時五十分着

テント場 六時発

芝沢ゲート 十二時四五分下山

同行者 相方

翌日帰路、易老岳の先、面平(めんたいら)からの降りはザレの石が危なつかしい。落石起こさないよう、スリップして転ばないよう集中。脚の筋肉疲労は最大級。アップ、ダウンを繰り返しながらひたすら歩きます。樹林帯の中は直射日光が当たらないのでその点は助かりました。ようやく遠山川に架かる橋、易老渡橋が見えた時、疲れきった意識の中に歓喜と感謝の感情が蘇ってきました。光岳の山頂に長年預けておいたものを受け取つて、こちらの思いも届けられてホッとしたような……無事下山に感謝、相方にも感謝。日差しのきつい林道を芝沢ゲートめざして気力で歩いていると、白花のツリフネソウ! 白い花は初めて見つけました。最後はお花に助けられ心躍らせてのゴールでした。自然にも人にもしっかりと見守られて無事に山頂へ行つてこられました。思いが届き、すべてに感謝でした。後日白花のツリフネ

天城山～天城山、雨着は要るのか要らぬのか

樂しみにしていた伊豆の山旅、天城山へ。山と温泉と贅沢な時間を過ごせた三日間であった。天城山と言えばアセビのトンネルやアマギシャクナゲの季節が一押しだが、お花の頃は激混みだそうな……

越後の藪山と違ひ林床はすつきり何処でも歩いて行けそう。しかし登山道は結構荒れていた。杭が浮いていたり、土が削られて大穴があつたり、崖になつてしたり、深くえぐられて段差が大きすぎたり、そんな具合で歩きにくいものだから踏み跡はジワジワ脇にそれで森や林を傷つけてしまう。結局我々が山を荒らしてしまっているのだ。ガツクリ、すまん。道標だけはくどいほど設置してあつた。

今回は反時計回りで登山開始。△七時五十分△反時計回りは我々三人の他に二人、時計回りは三十人くらい。登り始めからガスがふわーっと流れては消えていた。今日一日曇りの天気と心得てスタート。雨ではなく、昨晩降った雨の零がポタリポタリと木の枝から落ちてくる。苔の緑がみずみずしくて美しかった。途中から霧がたなびいて今日の富士山は姿なく残念。ようやく紅葉が始まつた伊豆の山々、樹林帯を静かに味わいながら進む。

万三郎岳一四〇五メートル(山頂)に到着。△十時五十分△風が寒くレインウェアの上衣を着た。万三郎岳過ぎて万二郎岳一一九九メートル△十二時△の先まで大雨は降

らなかつたが最後十三時頃ついに本降りの雨。その後氣にならないほどの霧となつた。天気大はずれ。でも楽しかつた。時々アセビのトンネルの枝に頭をごつんこ。落葉を踏みしめて泥濘にハマらないようによく避けながら飛び歩く様子はまるで子どもたちの騒ぎよう。三十分ほど雨に降られたが動き回つて体は温かい。あつという間に下山。△十三時三十分△雨着山(あまぎやま)もまた楽しからずや。

さあ、温泉宿に直行だ。深田久弥氏の日本百名山、本日この山を持って完登のお祝いじや。山友さんや子どもの勧めもありお花の時期を待たず今年中に伊豆の山旅と相成つた次第。「百名山」や「百名山ブーム」に対しても考えること、物申したいこと一旦胸中に納め、今晚は素直に親子できささやかな祝杯だ。

二〇一二四年十一月十日・十一日・十二日

十日前泊

十一日登山行動約六時間 温泉宿泊

十二日修善寺ほか観光

同じ顔

金子靖夫

売却物件の所有者に面会するため、三条の事務所から阿賀野市へ向かつて道中のことだつた。通常なら阿賀野へはバイパスの四〇三号線を経由して行く俺だが、この日はご無沙汰していた秋葉区矢代田にある旧知の方のお宅を阿賀野への道中に訪問したくて、県道を利用していたのだ。知人宅を辞去して、矢代田交差点の信号機を少し新津方面に向かいかけた矢先の出来事だつた。「狐につままれる」とはこのことか。

営業車の車窓右側方から観たその人物は、大西さんには激似というか……。顔が大西さんそのものなのだ。おもわず、車を止めて、

「大西さん！」 東京の人が、どうして矢代田あたりにいるんですか？」

と声をかけたくなるほどだつた。実際に俺はその時、営業車を路肩に停車して、その人物をまじまじと観察した。大西さん激似人物は反対車線側にある古書店の前で、ほうきを持つて玄関先をそうじしている。間口が三間半ほどの小さな古書店だ。この人物は古書店の

店主なのか……。店舗脇の駐車場は四～五台は収納できる。俺は古書店に立ち寄ることに決めた。駐車場に営業車を駐車させ、店舗の玄関に向かう。二階建ての住宅併用店舗らしい。白地に黒色で「古書むくのき」との看板がバラベットに貼り付けられている。引き戸を開けて店内に入る。雑多という表現がふさわしい感じで、数脚の棚にびっしりと本の数々。それと玄関に近い場所に五十センチメートル程度の高さの台にも平積みの本の数々だ。

本たちには全く興味はなく、俺は例の人物を探した。そして店の奥までたどり着くと……。

奥には小さなカウンターがあり、年齢不詳だがアラフィフくらいの女性がイスに座り雑誌を読んでいる。堀の深い顔立ちで、美人の部類に入る人だ。例の人物のパートナーだろうか……。

「いらっしゃいませ。何かお探しの本がありましたら、遠慮なく申しつけください。ごゆっくりどうぞ」 声をかけられた俺は、女性に例の人物についてたずねることにした。

「あのう。初めておじやましたんですけど、屋号のム

クノキって、ご主人のお名前ですか？ 新潟県には、
ほぼ無い苗字なんですけど

もう何十回・何百回聽かれた質問なのだろう。事務的
だが愛想のある答えが返ってきた。

「はい。私たちは夫婦で京都から移住してきたんです。
椋木^{むくのき}つて主人の実家がある島根には割と多いんですよ」

「そうなんですか。あの実は、さつきご主人のお姿を
車から拝見しまして、親しくさせてもらっている東京
の先輩にそつくりな方だったので、古書には全く興味
ないんですが……。ついおじやました次第でして」

「そうでしたか。平日は午後になると近くの薬科大学
の先生とか学生さんが結構いらっしゃるんですけど、午前中のお客様はめずらしいなって思っていた
んです。二階が主人の仕事場になっていますけど、も
しお時間があるようでしたら主人とお茶でもいかがで
すか」

社交的で人生を悠々とエンジョイしている大西さん
のイメージを椋木氏に重ねるのは、不思議な感覚だろ
うことは想像できた。

「お言葉に甘えていいんでしようか？」
「かまいませんよ」

そんなやりとりの後、夫人の案内で通された二階の
部屋は、普通の事務所風なたずまいだった。椋木氏
はワークデスク上のデスクトップパソコンで作業中だ。
「二～三分で一段落しますから。そのソファーにかけ、待っていて下さい」

「お忙しいのに、突然すみません」

「古書の取引の世界も今やネットの時代でして、探し
ていたカント哲学のドイツ語版がドイツの問屋のネッ
トサイトでようやく見つかりまして、いま手配を終え
たところです」

椋木氏はカントだの哲学だの、俺には全く興味のな
いことをのたまう。やがて、マグカップを二個トレイ
に載せて、椋木氏もテーブルを挟んで向い側のソファ
ーに落ち着いた。やはり、相対してみると激似だ。も
ちろんヘアスタイルの違いはある。大西さんはきつち
り耳をだした短髪だが、椋木氏は耳が少し隠れた長髪
ぎみだ。両者の顔の違いをあえて見い出すとすれば、
鼻と眉毛だ。鼻に関しては椋木氏の方が少し高い感じ
だ。眉毛の方は大西さんの方が濃くて凜々しい感じだ。
体形は筋肉質の大西さんに対して、椋木氏はシユツと
したモデル体型だ。身長は同じ位だろうか。俺は変な
ことをイメージした。二人がツーショットになつたと

して、「双子です」と言われても誰も疑わないだろう。つまり、『棕木氏の顔』の方程式は成立するのだ。

生き別れた双子の兄弟が東京にいるかどうか聴いてみるべきだろうか。大西さんからは双子だなどの話題がでたことはない。

「申し遅れましたが、金田と申します。不動産売買・

仲介の仕事をやっています。古書には全く興味がないんです。棕木さんが東京在住の知人に……大西さんというんですけど……あまりにもそつくりな方だったのです……」

棕木氏は驚いた様子もなく平然としている。

「いや、世の中には……国内外問わず、もちろん双子とか血縁関係を除いてですけど。三人は同じ顔の人がいるといわれています。ドッペルゲンガー（自分の分身）なんていう考え方もありますから。僕はその大西さんには会わない方がいいですね。同じ顔の人同士の対面は死の前兆らしいのです」

またしても二人が対面する場面をイメージする自分に安直さを覚えつつ、ドッペルゲンガーという初めて聞く言葉にも幻想的な思いに駆られ、俺は大西さんと同じ顔の棕木氏にたずねた。

「じゃあ。今日棕木さんと知り合ったことは大西さんには言わない方がいいですかね？」

「いや。ドッペルゲンガー現象が死の原因なんて、科学的には何の根拠もないですから。僕がなにかの機会で東京に行つたとして、大西さんに出会う蓋然性はほぼゼロパーセントでしょう。新潟にそつくりな男がいたってことは話していいですよ」

棕木氏は柔軟な笑顔で答える。

コーヒーをいただきながら、俺は思った。まず二人の対面はないとしても、双子のような二人の性格はどうなんだろう。大西さんは本音も建前も、ウソも真実も顔色一つ変えずに人と対話ができる自然なスキルがある人で、演技もできる。ものまねもできる。周囲の人達への細かい配慮も上手い人だ。言つてみれば存在そのものが魅力的なのだ。そんなところが、俺が大西さんを営業の師匠、というか尊敬する人生の先輩とあがめる理由もある。

それに対して棕木氏はウソがつけないような誠実な人のようだ。周囲からは、その博識さから一目置かる存在で、完成された人格者に見える。思考を巡らす俺の沈黙を棕木氏の言葉が遮った。

「ウチは専門書に限らず、小説とか手に入りづらい古

い雑誌なんかもネットで入手できますから、いつでもご用命ください。近所の子どもからのコミック本全巻をそろえて欲しい、なんていう注文も受けてますから。

ところで、金田さんは普段どんなジャンルの本をお読みですか？

書籍を扱う店のオーナーらしい質問だ。

「まあ、エンターテインメント系の小説でしようか？　いまは地元三条出身の相場英雄の小説を追っかけてますかね。あと東野圭吾の加賀恭一郎モノとガリレオ湯川モノはチェックしてます。俗っぽいでしょ」

俺は正直なところを答えた。

「いえいえ。私も東野作品は追っかけてますよ。骨のあるストーリーで、結構映像化されてる作品が多いですね。加賀刑事が活躍する最近の“麒麟の翼”は、よかつたですよね」

椋木氏の声のトーンは柔らかく、心地のよい気分にさせてくれる。“麒麟の翼”は図書館で予約中だが、二十人待ちくらいでいつ順番がくるか分からない状況だ。

「それはまだ読んでないですね」

「その本今ありますから、お貸しますよ。いつでも俺は答えた。

金田さんの都合のいい時に返してくれればいいですか
ら」

椋木氏のありがたい申し出だ。

「ほんとですか。ありがとうございます」

いま最も読みたい小説だったんで感謝感激だ。もう少し話してみたい気持ちだったが、お互い仕事中だ。辞去しなければならない。大西さんとは読書談義をすることもないのだが、この激似人物とは読書の趣味が合いそうだ。時間の許す休日にでも、また訪ねてきたい場所になつた。それにしても不思議な出来事だつた。

椋木氏の声のトーンや話し方は大西さんとは全然違うのだが、自分に言い聞かせないと目の前の人物が椋木氏なのか大西さんなのか判断がつかなくなる瞬間がある。それだけ二人の顔がオーバーラップしてしまうのだ。

俺は「古書むくのき」を後にし、柔らかいものにでも包まれているような気分のまま、阿賀野へ向け車を走らせた。

その後、椋木氏の所へは三回ほど訪問したが、椋木氏が不在であつたり、時候挨拶だけで終わつたりで、深く話し込むような機会はなかつた。それと俺の仕事も秋葉区矢代田とは逆方向の長岡市が中心になつたこ

ともあつて「古書むくのき」への脚は自然と遠のいた。

椋木氏との出会いからもう、十年以上経過した。椋木氏との浅薄な関係とは対象的に、この十数年間で大西さんと俺は、二人のプライベートトラベルツアード、越後湯沢・軽井沢・草津・箱根・鴨川・鎌倉・江の島などに毎年一回から二回は旅をした。

非日常の楽しみを大西さんから提供してもらつた形の俺だ。観光スポット巡り、温泉、グルメ、カラオケ、ガールズトークならぬ中年男のボーカルトーク、ときには温泉街のスナックへ繰り出すなどなど。明日への英気を養う時間を共有してきた。

大西さんは会社を経営する社長なので、時間コントロールは自己責任だろうが。宮使いの身の俺はスケジュール調整にいつも苦労することが悩みのタネで、女房からも、

「今度はどこに行くの？ いつもいつも自分ばっかし、色々な所にいって！」

との苦言に耐える必要はあつたが……。常に俺は大西さん激似顔の椋木氏のことは黙っていた。大西さんのリアクションが怖いのと、めんどくささも手伝つて俺の胸の内に閉まつたまままでいた。このトラベルツアードは近年のコロナパンデミックと大西さんの身に起き

た厄災のために四年ほど前から不可能となつた。

そして本年二〇二四年。パリオリンピックでの日本選手の活躍やドジャースの大谷選手の大活躍で興奮する中……。さらに猛暑の夏を過ごしている渦中……。

それはお盆直前の出来事だつた。ケータイが大西さんからの着信を告げた。久しぶりに大西さんと話せることを期待し、変なときめき感を覚えたが、着信の相手は大西夫人の美寿々さんからだつた。

「お久しぶりです。あの……。実は、主人が六月二十七日に亡くなりまして……。連絡が遅くなつてごめんなさい」

と美寿々さんは告げた。昼の弁当を食べ終え、俺はその時いつものようステーキの駐車場に停めた営業車の車中にいた。シートにもたれて、NHKの連ドラ再放送をワンセグで觀ていて最中だつた。

四年前に脳出血で倒れた大西さんは、一命は取り留めたものの、半身不随の身体になつてしまつていた。当時の美寿々さんの話しによれば要介護度は最も重篤な「五」だつた。四年前はまさにコロナパンデミック禍中でもあり、見舞いにも行けず、回復を祈るばかりの俺だつた。

「自宅に戻られてリハビリ中と聴いてましたが……」

震えながらの声で俺は聞いた。

「いえ。今年の三月頃からは、また病院のお世話をなつてまして。もうだいぶ悪かつたんです」

リハビリでまた元気な体に戻る大西さんをイメージしてばかりの俺だったが、その願いは叶わなかつた。美寿々さんの声は、今にも泣き崩れそうだ。なんと言つて励ませばいいのか。俺自身も意氣消沈状態なのだ。なんとか気持ちを立て直し通話に戻る。

「あの……。奥さんは、大西さんの最期を見取ることができましたか？」

「はい……」

せめて生前の大西さんへのお札を告げたくて、墓参りをさせてもらいたい。

「もう四十九日は過ぎてますけど、お墓の方は？」

「はい。大西家のお墓は八王子の方で、遠いので……。近くに埋葬できる墓所がないものか探してます」

「そうですか。お墓が決まつたら連絡ください。まだ悲しみは癒えないと思いますけど……。どうか気をしつかりと持たれて、息子さんや、娘さんご家族と健やかに……。生きてください」

大西さんは東京・練馬の大泉学園で、俺は新潟の三

条だ。新幹線経由首都圏電車利用なら三時間弱。車でも高速利用で四時間もあれば会いに行ける距離だが、もう会えない。やりきれない気分だ。

俺が在京の大学卒業後に就職した会社の教育係が大西さんだった。胡散臭い広告会社だったが、大西さんがいるだけで仕事を続けられた。新宿、吉祥寺、立川と勤務する事業所は変わつたが、直属の上司は常に大西さんだった。どれだけのことをこの先輩に教わったことか。感謝してもしきれない。大西さんとの想い出が走馬灯のように俺の頭の中を駆け巡る。

「体が動くうちに楽しもうぜ金田。七十とか過ぎればもう体が動かないから。今のうちだぜ。冬の草津も最高だぞ。スケジュール組むから予定しておけ！」

そんな大西さんの電話連絡がきのうのことのように出いだ。俺は美寿々さんに精一杯の元気づけの言葉とお悔みを、それから俺自身の残念な気持ちを伝えて通話を終えた。大西さんの訃報は、俺の椋木氏に会いたいという気持ちに火をつけた。美寿々さんとの通話を終えると、俺は車中で椋木氏あてにメールを打つた。

『椋木さん、ご無沙汰しております。お元気ですか。昔の路線価図の本があつたら探して欲しいです。仕事

の参考資料にしたいです。この週末土曜あたりにおじやましてもいいですか？』

しかし、椋木さんからの返信は当日も翌日もなかつた。俺はアポなしでもいいかと思いつつ、ともかく土曜日に矢代田へ行くことに決めた。三条から数年ぶりで秋葉区方面への県道を矢代田へと車で駆けた。お盆連休に入つた土曜日ということで、店が開いているかどうか分からぬが、店舗兼用住宅だから旅行中でない限り会えるだろう。

矢代田に到着してみると、古書店は営業していた。パラペットの「古書むくのき」の看板を確認して引き戸を開けると、冷房が適度に効いていて涼しい。学生風の客が三人、立ち読みしている。あと年配のカップルの姿があった。俺は客たちの邪魔をしないように、静かに奥のカウンターを目指した。驚いたことに、カウンターのイスに座っていたのは椋木夫人ではない。アラサーと見える若い女性だ。スマホから顔を上げた女性に俺はたずねた。

「あの。椋木さんはいらっしゃいますか？ 三条の金田と申します」

「はい。少々おまちください」

スマホを通話モードにして、

「純ちゃん！ お客様！ 三条の金田さまあ！」と、二階の事務室へ連絡してくれている。ほどなく現れたのは、明らかに椋木氏ではない。誰だ？ この若い男は。まず俺は疑問をぶつけた。

「久しぶりにうかがつたんですが……。椋木さんはいらっしゃいますか？」

「もしかして、父のことでしょうか？ 僕は息子の椋木純也です。で……、こつちは妻の玲美です。実は金田様のことは父から聞いておりまして」

純也と名乗った若い男が答える。疑問のひとつは解決したが、問題は椋木氏と夫人の消息だ。それと椋木氏が俺のことを息子さんに話していたとは。俺は率直にたずねた。

「それで……。椋木さんと奥様は今どちらに？」
「実は……。金田様」

一瞬の間。

「よかつたら二階の部屋で話しませんか？ 父から金田様へのメッセージがパソコンに保存してあります」

純也からの申し出だ。俺へのメッセージとはなんなんだろうか？

「玲美。金田様とお茶するから。店の方をよろしく」「了解。冷蔵庫にリアチーズケーキあるから、コーヒー

ーのお供に出してあげて」

「おう」

若いカツプルのやりとり後、訪れた二階の部屋は椋木氏と最初に面会した当時のままだつた。ソファで対面の純也の顔を観ると、やはり親子だ。椋木氏の面影はあるが、この息子さんの顔の方が椋木氏よりも堀が深く、エキゾチックなイケメンだ。むしろ椋木夫人の方に似ている。

「五年前ですが……」

二人分のアイスコーヒーとレアチーズケーキをテーブルに置くと、純也が切り出した。

「はい」
俺は相づちを打つ。

「父と母は、父の実家がある島根の出雲へ移住しました。その際に僕がこの店を引継いだ次第でして。ただ……」

⋮

純也は口ごもる。

「はい」

俺は再び相づちだ。

「父は今年六月に亡くなりました。急性の心筋梗塞でした」

衝撃的な純也の言葉に、俺は一瞬意識が遠のく思い

がした。同時に例のドッペルゲンガー現象が頭をよぎった。地の底に転落していく同じ顔の二人と、それを地上からなすすべも無く見送るしかない俺。そんな感覚のあと、途方もない喪失感に襲われた。なんとか力を込めグラスを手にしてアイスコーヒーをゴクリと飲み、気持ちを落ち着かせて俺は言つた。

「純也さん。私が今日おじやましたのは……。大西さんという大切な先輩が今年六月に亡くなつたからなんです。奥様から訃報をもらつたのが今週のことです。その大西さんは椋木さんとうり二つの顔の方で……」

「はい。そのことは父から聞いておりました。金田さん宛ての父のメッセージをプリントアウトしますので、少々お待ちください。どうぞレアチーズケーキを召し上がってください。旨いですよ」

「はい。ありがとうございます」

まるで今日の俺の来訪を予期していたかの様に、淡々と受け止める純也がいた。デスクトップパソコンで必要な操作を行い、印刷されたA4紙面を手に、彼がソファに戻るまで二～三分程だった。

「父が金田さんへ宛てたメッセージがこれです。読んでみてください」

この文面は椋木氏から息子の純也へ宛てたメールの

ようだ。『三条の金田さんの訪問があつたら、このメールを彼に読んでもらつてくれ。お父さんから金田さんへの大事なメッセージだから。純也よろしく頼む。』

— 棕木氏から俺にむけたメッセージ —

『金田さん、ご無沙汰しています。私事で高齢の両親の面倒を見るために、夫婦で出雲の実家へユーターンすることになりました。薬科大学の関係者やお得意様には通知したのですが、数年お見えにならない方々には連絡しないままでした。ただ金田さんのことは不思議と印象に残つております。こうして純也を通じてメッセージをさせていただく次第です。』

「古書むくのき」は、幸い純也と玲美さんが引継いでくれて継続することができています。彼らも悩んだ末、東京から矢代田に来てくれました。息子夫婦には感謝しています。父は昭和年代から出雲でそば屋をやつております。足腰の弱つた父母に代わつて我々夫婦が、六十代も後半になつて家業を継ぐことになりました。まあコロナ感染症禍期間は、父からそば打ちを教わるのにちょうどよい期間でした。その父は東京オリンピックの年・二〇二一年に亡くなり、母も後を追うように二〇二二年早々に亡くなりました。

金田さんにお知らせしたい出来事があります。先月、

十月のことです。東京池袋のデパートで「味覚の秋／山陰・山陽グルメ三昧」なる催しがあります。島根を代表するかたちで、我々の店「出雲そば・むくのき」を出店させてもらいました。

生めんとつゆのセット販売とどんぶりの立ち食いスタイルで営業させていただきました。十日間の期間でしたが、好評をいただきました。十日目、最終日の終了時刻直前にいらっしゃったお客様が印象に残っています。四十歳くらいの男性でした。その時はもうセット販売品は完売しておりますので、男性は立ち食いで召し上がられた後、

「ネット販売はやつていますか？ 家族がみんなそば好きなんですね。すごくおいしいので、お取り寄せ注文したいです」

とおっしゃいます。

「それでは、今ご住所をお聞かせいただければ、出雲に帰り次第発送させていただきます」

とお答えしました。すると男性は名刺を渡されまして、

「この住所宛てに送つてください。私司法書士をやつてまして、自宅兼事務所の住所です」

とのことです。

『司法書士 大西賢一 住所：東京都練馬区大泉学園
二一〇一〇 T E L : ○○○○ - ○○○ - ○○○ ○
E メール：○○○○○.c o . j p』というのが名刺の
内容でした。大西という苗字が妙に気になりました。
金田さんと最初にお会いした時のことを想い出します
た。踵を返して背を向けられた男性に声をかけました。
もちろん頭の頭巾とメガネを外して顔の表情がよく分
かるようにしてです。すると男性は、驚いた表情で言
います。

「あつ。びっくりした。ご主人、私の父にそつくりで

すね」

それで確信しました。この方は金田さんの先輩・大
西さんのご子息なんだと。大西賢一さんには、その場
で事情を話しました。賢一さんは、金田さんのことも
話しておられましたよ。

「金田さんは、おっさん一人旅の父の相棒です。新米
の季節にはいつも新潟のお米を送つてもらつていま
す」

とおっしゃっていました。スマホで写真を撮らせて
欲しいとの申し出には、やんわりとお断りしましたが。
ご子息とはいえ、間接的に大西さんとお会いしたよう
な気分でした。どうですか？ 金田さんも驚いたでし

よう。よかつたら大西さんもお誘いして、ぜひ出雲へ
いらっしゃい。とびきりのそばをごちそうしま
す。それと時々、純也夫婦の「古書むくのき」へも遊
びに行つてやつてください。純也も東野圭吾のファン
ですよ。ガリレオシリーズの「透明な螺旋」はよかつ
たですね。湯川学の半生がつまびらかになりました
よね。今度会つた時に読書談義しましよう。では。お
会いできる日を楽しみにしています。お元気で。お仕
事もうまくいきますように。』

二〇二三年十一月吉日 棕木圭介

メッセージを読み終えた俺は、自然と涙がこぼれて
きた。俺はなにやつてんだ。大事な人生の先輩がもう
一人いたんじやないか。どうして何年もここに来なか
つたのか。棕木さんともつと会つて話をしたかつた。
出雲へも行つてみたかつた。この喪失感からどうやつ
たら立ち直れるんだろうか。しかも意味は分からな
いが、棕木さんが亡くなつたのも今年六月だなんて。ド
ツペルゲンガー現象だとしたら、そんなものクソくら
えだ。俺の嗚咽を察知してくれて、純也がティッシュ
ボックスを用意してくれた。

「今、出雲の店は母と求人に応募してきた二十代の若

者で切り盛りしています。伝統の味は守られています。

金田さんの心配はご無用です」

純也の言葉もうわの空状態だ。俺は疑問に思つた。なぜ椋木さんは俺のところに直にメールをくれなかつたのか。

「どうして椋木さんは私に直にメールをいただけなかつたのでしょうか？」純也さんは、その辺の事情をご存知ないですか？」

純也に罪はないが、俺は感情的に言つた。

「父の遊び心だと思います。古書むくのきの経営が僕と玲美に変わつたことも含めて、金田さんをサプライズさせたかつたんですよ。そんな父が突然亡くなつたものですから。金田さんの連絡先を僕は全く知らなかつたもので……。こんなかたちになつてしまつて。まさか大西さんまで、お亡くなりになるなんて……」

大西さんが亡くなつたことに、純也も悔やんでいる

様子だ。純也に対して感情的になつてもしようがない。

「いや。純也さん、ごめんなさい。疎遠にしていた私が悪いんです。大切な人を二人同時に失つたショックで、つい泣いてしまつて。感情的になつてしまつてすみません」

「僕もいま複雑な心境です。あの金田さん。もしよか

つたら近々出雲へ行つてやつてください」

純也の言葉に俺は九月の三連休をイメージした。その時ふと、大西美寿々のことが頭をよぎつた。彼女にも出雲行きを打診してみようか。断られることも想定してダメもとで、その日のうちに美寿々さんに連絡すると、彼女も椋木夫人に会つてみたいと言う。その夜、俺はネットで羽田・出雲間の航空便を検索した。

九月のシルバーウィーク連休期間。「出雲縁結び空港」から外に出ると、まだ暑いが空気が清々しい。空港バスター・ミナルから出雲市駅行きバスに乗り込む。ちょうど三十分で出雲市駅に到着する。駅から「出雲そば・むくのき」へは徒歩で十数分の距離と純也が教えてくれた。

「暑いのでタクシーを使いましょか？」

俺が言うと。美寿々さんは、

「街を歩きたい」と言う。

「椋木さんの奥様つてどんな方ですか？」

歩きながら美寿々さんに問われる。

「俺も会つたのは数回程度なんですが。知的な美人で、きつと美寿々さんは話しが合うと思います」

ゆっくりと門前町・出雲市街地を歩く。俺はドキド

キ感が増してくる。なにせ自分が間に入るかたちで、二人の未亡人同士を引き合わせることになったのだから。

「出雲そば・むくのき」の暖簾をくぐり抜けて、玄関引き戸を開け店の中に入ると、椋木夫人の笑顔が待っていた。一方の美寿々さんも笑顔だ。言葉もなく二人は抱き合い、二人とも涙を流した。やはり美寿々さんは誘つてよかつたと俺は思い、二人の先輩へこちらのことはもう大丈夫ですと叫びたい気持ちになつた。やがて椋木夫人は、抱擁を解くと奥の厨房にむけてオーダーの声をかけた。

「歩君！ 大切なお客様お二人に、とびきりの天ざるそばを出してあげて！」

同じ顔をしたパートナーをそれぞれ失つた二人の女性が、この後どんな会話をするのか……。悲しみを乗り越えて、今後の人生に希望を持つていけるのか……。

大西さんと椋木さんに変わつて、俺が見届けるつもりだ。同じ顔の二人の冥福を祈りつつ。

作詞 「新潟米の歌」

長橋正宣

作詞 「おこめはみんなの命です」

長橋正宣

一、植えた早苗が 田の面にそよぐ
風もやさしい 子守歌

なき深雪 雪解け水の
めぐみ豊かに 稔る幸
うまいお米は 新潟の
土が育てる 宝です。

二、暑さ寒さに 鍛えて耐えて
咲いてうれしい 稲の花
黄金波打つ 稻穂を見れば
つもる苦労も 消えてゆく
うまいお米は 新潟の
夢を育てる 力です。

三、日本ばかりか 世界の国が
引く手あまたの 米どころ
あらし吹いても びくともしない
風味豊かな 米づくり
うまいお米は 新潟の
明日を育てる 光です。

一、おはようお日さま 窓開けて
背伸びをすれば いい香り
母さん毎日 ありがとう
ほかほかごはんが 待っている
幸せ育てる 新潟の

お米はみんなの いのちです。

二、うれしい遠足 運動会
やっぱりおにぎり おいしいな
たのしい学校 給食は
カレーライスに オムライス
幸せ育てる 新潟の
お米はみんなの 力です。

三、ぺったん餅つき お正月
十五夜おだんご 秋まつり
おやつあられもせんべいも
ふるさと生れの お米です
幸せ育てる 新潟の
お米はみんなの 光です。

川柳～佐渡の修学旅行を終えて～

旭小学校 六年生

太鼓鳴る ドンドコ鳴るよ 太鼓音

青木春翔

イカ裂きで パツと飛び散る イカの墨

高橋勇人

佐渡でしか 見れないトキを 見てきたよ

大桃心花

ホテルでの 風呂貸し切りだ 嬉しいな

高橋悠来

飛んでいる たくさんのかもめ 佐渡の海

大山思穂

佐渡金山 金塊レブが ずつしりだ

田沢蓮汰朗

砂金採り 金採る歴史 學んだぜ

笠原大偉也

フエリーカから カモメがのぞく 旅始め

塙田暁人

きれいだな 景色はすごい 船からの

工藤彩愛

佐渡の海 水面に揺れる たらい舟

難波いまる

四季詠草

伊久礼俳壇(順不同)

我の突く杖音に涼新たなり
待望の音となりたる夕立かな
秋涼し尾にも塩振る焼き肴

鶴巻雄風

百日紅しかと咲きたる瘤の先
気がつけば菜虫悪さを仕放題
夕立後忘れし傘の五六本

村越允弘

田辺起知

夜桜や年金暮しつつましく
炎天下天を仰ぎて鎌を研ぐ
倒伏の稻に手を添ふ雨月かな

小夜時雨人それぞれの暮しの灯
巳の刻に白き鳥とぶ寒の内
古希の梅雨最後となりしクラス会

菊田チイ

開運の賽銭五円花曇
青田風仕事帰りの深呼吸
玄関に空蝉ひとつ孫帰る

市川明美

冬晴れの何処か嬉しき車窓かな
雪囲い解きて一服庭景色
若葉風そよぎて揺るぐ田の青さ

田辺克文

頓知から溢れくる知恵半夏生
笊の枝豆空になるまでの無言
迷ふ妣花野への道歩いてる

小出のぼる

古寺に咲くあじさいのみな新種
笊の枝豆空になるまでの無言
迷ふ妣花野への道歩いてる

山崎洋子

墓洗ふ帰りに父祖の田を廻り
茶柱の立ちし敬老の日の朝茶
秋風や菊の形の法事菓子

関川芳弘

深閑と万縁の中旧家あり
サングラスかけて老人格好よし
片陰をゆずりあいして野辺送り

捧時子

あとがき

委員長 大山 隆夫

文集「伊久礼」
発刊委員
委員長 大山 隆夫
委員員 菅原 昭子
委員員 熊倉 貞子
委員員 藤田 清子

やわらかな日差しが心地よい季節となりましたが、皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

このたび、地域文集『伊久礼』を無事にお届けできることが、心から嬉しく思っております。文集づくりを始めたとき、私たちは「この町で暮らす人々の、温かい声を集めたい」と願いました。そして、皆さまからお寄せいただいた一つひとつの文章や作品は、まさにこの町の「宝物」のような物語で溢れています。

ページをめくるたびに、皆様の優しい眼差しや、ふるさと「伊久礼」への深い愛着が伝わってきます。「多忙の中、貴重な作品をお寄せくださった執筆者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

皆様のご協力なしには、この文集は完成しませんでした。本当にありがとうございます。この一冊が、皆さまにとって、ご近所の方と笑顔で語り合うきっかけとなつたり、ふと心が温かくなるような、そんな「お茶請け」のような存在になつてくれたら、これ以上の喜びはありません。

これからも、「伊久礼」の優しい繋がりを大切に、次号に向けて歩みを進めていきたいと思つております。

